
いつか祈りが芽吹く時に

長月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつか祈りが芽吹く時に

【Nコード】

N4147Y

【作者名】

長月

【あらすじ】

いつかどこかで為された祈りの先を描くように、少年は理を異にする世へ迷い込む。そこで出会う人々とのふれあいを通して彼は何を思うのか。偶然かあるいは運命か。少年の紡ぐ物語はまだ始まったばかりだ。とかなんとか大仰な事を書いたところで未熟な文章はどうしようもないのですがどうか御容赦願えれば幸いです。

01 「いつか」

「いつか」

淡く色付いた花弁の舞う中、その場にいるのは一人の女と一人の男だけだった。

「いつか、どこかの未来で、私の子供すえと貴方の子供すえが再び出会うことが出来たら」

女性は、溢れる想いが雫になる前にその想いを言葉に変える。

「それってとても素敵なことだと思わない？」

不器用に微笑めば、貴方は一層悲痛そうな顔を歪めた。
そんな顔をさせたいわけじゃないのに。

「でも、」

その先の言葉を捜すように何度か口を動かしながら、けれどそのまま黙り込んでしまった。

いつでもすらすらと言葉を紡ぐ彼にしては珍しいことだ。
それだけ彼にとって、私にとっても、今この時は到底冷静で居られるものではないと知っているけれど。

「……でも、それは君じゃない」

そして、僕でも、ないんだよ。

唇を噛み締めて、零れそうになる涙をやり過ごす。
瞳いっぱい涙を溜めている彼の前で泣くわけにはいかない。
先に泣いてしまえば、泣き虫な彼が泣けなくなってしまうから。

「ここに残ればいい」

「それはできないことを貴方はよく御存知でしょう？」

「だけどっ・・・！」

そうできたらどんなにか幸せなことだろう。
彼の手を取って、一緒に生きることができたら。
けれどもそれは、消して叶わないと知っていた。
でも。

「幕が下りたら、潔く舞台から降りなきゃいけないの」
子供じゃないんだから聞き分けなさい。

厳しく言っただつもりの言葉は震えてしまった。
堪えるように俯いていた彼の下には小さな雫の痕。
きつとお互いすぐ情けない表情をしているのだろう。

「君がいなくなるなんて耐えられないっ・・・」

目の前でポロポロと涙を零す彼に、つられそうになるのを必死で
堪える。

まだダメだ。

あと少し、ほんの少しでいいから。

「何年経つても、天と地ほどに隔たれたとしても」

これだけは伝えなきゃいけない。

「この思いだけは変わらないわ」

だから。

「またいつか」

「っ！」

叫んだ彼の声が遠くなり、目から滴が零れ落ちる。

止め処なく流れ落ちるそれに気付かない振りをして、身を包む淡い光に意識を預けた。

意識が光に融けるその前に思ったのは家族の事でも救った世界の事でもなくただ一人、涙を流す青年の事

傍にすることが叶わないのなら、せめて誰かがその涙を優しく拭いてあげてほしいと願うことは罪なのだろうか。

02 夢を見ていた

夢を見ていた。

蒼海の青に、夜空の黒。

哀しくて、愛しくて。

すぐに夢だと気付いた。

痛みと穏やかさの同居するその感覚は、幼い頃から続く夢と同種のものだったから。

左側の扉が開きます

扉にご注意ください。突然流れたアナウンスに緩慢に目を開けばみな降りた後なのだろう。

眠っている男性、おしゃべりに夢中の中学生、メイクの確認をする女性に、ゆっくりと扉へ向かう老人。

終点に着いた電車の中には数人の姿しかなかった。

座席と脹脛はげむひざで挟むように置いていた鞆を拾い上げ、ポケットの上からケータイの感触を手早く確かめながら扉をくぐり、人の流れに逆らうことなく改札へ向かう。

僅かに感じる冷たさに手の甲で頬を擦れば予想通りに濡れた跡。

そのまま手首の時計に目を遣れば16時37分。

不意に聞こえた声にそちらを向けば母親の服の裾を引っ張りながら喧騒に負けないよう一生懸命声を上げる幼児の姿。

微笑ましく眺め通り過ぎる。

嫌になるぐらいに晴れた空。

「あつっー・・・」

8月の日はまだ暮れそうにない。

「ただいま」

玄関の戸を開きながら中にいるであろう人物に声をかける。

冷水で洗い幾分さっぱりした顔を棚から引き抜いたタオルで拭き、リビングへ続くドアを開けば途端に冷えた空気が体を包む。

茹だるような暑さの外と比べるまでもなく、冷房の効いた室内は天国に等しい。

ソファーになだれ込んだまま目を閉じて体の熱を追いやる事に専念する。

動くのが億劫でただ寝転んだだけなのだけど。

そうしてだらけているとカチャ、とドアの開く音。

パタパタと近づいてくる足音にソファーの背から右手を突き出しゆらゆらと軽く振りながら「ただいま」と再度声をあげた。

「あれ、帰ってたの？」

「んー、今さっき」

今日も暑かったねー、と上から降ってきた声に目を開けると洗濯物を抱えた母の姿。

こちらを見て少ししかめられた表情にその視線を追ってみればくし

やくしやに脱ぎ捨てられた制服に行き当たる。

「・・・暑かったから」

「理由になりません」

苦し紛れの言い訳は当然ながら聞き入れられず、差し出されたハンガーを大人しく受けとる。

「何か飲む？」

「お茶。氷いっぱい」

「2：8くらい？」

「いやいやどう考えても逆だから」

カラン、カラン。

氷がグラスの底にあたり音を立て、続けてお茶を注ぐ音。

「はい」

差し出されたグラスが氷だらけじゃないのを確認したのは内緒だ。喉元を通る冷たさが気持ちよくてそのまま喉を鳴らして一息に流し込む。

「すごい飲みっぷりね」

「予想以上にカラカラだったみたいだ」

「ちゃんと水分とらなきゃ」

「とってたつもりなんだけどなあ」

額から流れる汗を乱暴にタオルで拭う。

体に籠った熱はそう簡単に追いやられてはくれないらしい。

「シャワーでもかかってきたら？」

見てることちが暑苦しいわ、と眉を顰めながら言う。

「んー・・・」

確かに風呂場で水でもかかればこの熱も冷めるかもしれない。

「そうしよっかなあ・・・着替えとってくるよ」

「ついでに鞆も持っていくこと！」

「りょーかい」

声に従って鞆を持ち上げ一旦部屋に行こうと扉へ向かいながら、ふと思いついて中から取り出したペットボトルを冷蔵庫に入れる。随分ぬるくなってしまうが、後で飲むときにはいい具合に冷えているだろう。

「そういえば、明後日は暇？」

「明後日？」

夕飯時、母からの問いかけに箸をとめ夏休み中の部活の予定を思い浮かべる。

「何かあるの？」

明日は活動ありだが明後日はどうだったか。

美術部というなんとも個人作業ばかりなうちの部は基本的に文化祭の展示用と県や市のコンクールなど必要最低限の提出さえすれば咎められることはないのだ。

ほぼ毎日来ている人、文化祭前などだけ来る人、その日の気分で来たり来なかつたりする人。

全員が揃うことは珍しいが、それでも行くと誰かしら活動している。そんな部であるために夏季休暇期間の活動表をあまり気にしていなかった。

「折角夏休みだし、今年も行こうかと思って」

そう言って笑みを浮かべる。

行く、というのはきつと恒例の旅行のことだろう。

自然好きなどころのある母は、長期休暇のたびに自然溢れる場所に行きたがる。

といっても、キャンプではなくただ自然に囲まれた旅館でのんびり

することが多いのだけ。

出発は突然で計画性が感じられないことも多々あり旅行というのは御幣があるかもしれないが。

突発的ではあるものの幼い頃から続くそれはもはや我が家の恒例行事と言ってもいい。

自然好きなのは俺も同じだし。

折角の家族の団欒だ。

断る理由は特に見当たらない。

「明後日なら多分空いてる、と思う」

「やった、じゃあ決まり！」

至極嬉しそうに一層笑みを深くする。

「いやー、でもこの年になってもお母さんと旅行に行ってくれる息子ってどうなのかしら」

「どうせ夏だからって予定なかったしいじゃん別に」

「友達や好きな子誘って遊びに行ったりしないのー？海行くとか、お祭りに行くとか」

「遊ぼうと思えばいつでも遊べるし、っていうか好きなやつなんていません」

「せっかくの夏休みなのに恋の一つもないなんて！」

「可愛いそうな子、と笑いながら言う母に「別に一緒に行かなくてもいいんだけど」と抗議する。」

息子の強がりを見笑ましく眺めるようにニコニコしながら「ごめんごめん」という母は絶対に分かっていなさそうだ。

「焦って彼女作っても楽しくないし」

と、最後に小さく反論して再び箸を動かし始める俺の様子が拗ねた子供のようで可笑しかったのだろう。

クスクスと笑い声を聞きながら残っていた野菜を口に放り込んだ。

「だあ、あああ」

息を思いきり吐き出しながらベッドに転がる。

手足を広げ脱力したようにベッドに体を委ねればじわじわと睡魔が訪れる。

夏は苦手だ。

暑さに体力は簡単に奪われるし、やる気もあっさりと消えてしまつ。とにかく暑いのが駄目だ。

体にこもった熱が煩わしくて仕方ない。

「うわっ、」

熱から逃れようと半回転すると危つく床にダイブしそうになる。

慌てて床に着いた左手を曲げて、勢いをつけて体を戻した。

「はあ……」

明後日といえ出掛けるならデジカメでも充電しておこうか。

軽くスケッチできるように準備をして、旅先を描くのも良いかもしれない。

母のことだからきつと、海か湖か、何かしら水のあるところだろう青を使うのは苦手だけれど。

それよりもまず明日貸す約束をした漫画を探さなきゃいけないか。

ああでも、やっぱり支度は明日にしようか。

眠くて面倒くさいし。

「—————」

自然と下がる瞼に任せて目を閉じる。

どこからか呼ぶ声が聞こえた気がするけれど、暗転した視界と共にそれも次第に聞こえなくなつた。

03 じれじゃあまるで

閉じた瞼の向こうに淡い光が見えた。

掴もつと手を伸ばしたけれどそれは指の間をすり抜ける。

ふわふわと浮かぶそれに。

「目が覚めた？」

「え？」

突然聞こえた高めの声に瞼を開けば視界いっぱい広がる緑。

ぼんやりと眺めているうちにそれが人の目の色だと気付いて慌てて後ろへ後ずさった。

少し距離を開けてみれば目の前にいたのは驚いたようにこちらを見詰める一人の少女。

なんだなんだなんだ！？

近いって言うか誰！？

「・・・いくら意識が戻ったからって、そんなにいきなり動くと危ないわよ？」

小首を傾げる姿が可愛い。じゃなかった。

「意識？」

「あなた、そこに倒れてたのよ」

少女が指差した方向を見れば、十メートル弱ほど離れた地点から

今いる場所まで何かを引き摺ったような跡。

「呼んでも返事がないし、日差しが強かったからせめて日陰に移動させなくちゃと思ったんだけど私一人じゃ担いだり出来ないから」

引つ張ってきたと言うことだろうか。

申し訳なさそうな顔でこちらを見ている少女にはかなりの重労働だっただろう。

俺はどちらかというと同身なほうではあるけれど、それでも17歳の男子である。

緩やかな下りになっているとはいえ、脱力した人間一人は中々の大荷物だ。

太陽も絶好調に輝いているみたいだし、炎天下の中放置されなかっただけありがたい。

「随分迷惑かけたみたいだなあ。ごめん、ありがとう」

「全然たいしたことはしてないんだけどね」

苦笑した彼女に笑い返しながら考える。

ここは一体何処だ。

辺りを見渡してみれば遮るものない空と緑の絨毯が広がっている。こんなところで倒れてたってどう考えたって普通じゃない。

それになにより。

「これ、何」

俺たちを中心に少し離れたところをふわふわと浮かぶ何か先ほどから気になって仕方が無い。

「何ってあの妖精たちのこと？」

「妖精……？」

「あなたのじゃないの？ずっとあなたを守るみたいに傍にいるから
てつきりあなたが連れてるんだと思ってたわ」

「いや知らないけど……っていうか自分がここにいる経緯がまず
分からないし」

ちつこい光の玉にしか見えないあれは妖精なのか。

妖精ってもっとなんかこう、羽とか、掌サイズの人型とかじゃない
の？

そもそも、妖精なんてそんなの。

「分からない……って、え、あなた記憶が？」

記憶喪失じゃないけど、下手に説明するのは止めた方がいいかも
しれない。

勝手に誤解してくれる分には別に構わないけど。

「いや、名前とかそういうのは分かるよ、でもここが何処とか妖精
とかよく分かんないや」

「……普通そついう時ってもっと取り乱すものじゃないかしら」

随分落ち着いているように見えるけれど、と少し怪訝そつに少女
が言う。

いやいや、落ち着いてるように見えるならそれは絶対気のせいだ。

「むしろ状況についていけなくて思考が停止してる感じ？」
混乱し過ぎて逆にリアクションが薄くなるみたいな。

そう言いながら自然と下がる眉。
どう考えても近所の公園って訳ではなさそうだし、そもそも景色が全然違う。

それに俺の知る限り妖精なんてものはお話の中にしか存在しない。
この少女もファンタジー映画に出てきそうな服装だ。
これで混乱しないやつがいるというのなら、そいつにジューズ奢ってもいい。

「そんな情けない顔しないの」

余程困った顔をしていたのか、怪訝そうな表情を一変させてクスクスと笑いだす。
笑い事じゃあないのだけれど、確かにウジウジと悩んだところでどうなるとも思えない。
だってこれじゃあまるで。

「じゃあ、もしかしてその色に釣られてやってきたのかしら」

「色ってなんの？」

「その髪と・・・目もそうね。綺麗な黒色」

そう言われてもいまいちよく分からない。

目の前の少女は綺麗な蜂蜜色の髪に新緑色の目で、間違っても黒目黒髪ではないけれど、少なくとも地球の総人口の過半数は黒系統の

髪なわけ。

それこそ掃いて捨てるほどいる黒髪さん黒目さんたちの中で突出して優れたものを持つてゐるわけでもない。

いくらここがもと居た場所と違つとはいえ、綺麗と言われても「え、何が？」という感じである。

集まつてくるほどの価値があるとは思えない。

「黒は特別なのよ」

「特別？」

「そう、昔世界を救つた英雄が・・・って、こんなところで話すのもなんだし、うちに来る？」

「いや、でも突然行つても困るだろ？」

「気を使わなくていいわ、お父さんはちょっと気にするかもしれないけど。」

「丁度男手がなくて困つていたところだし、行く当てないんでしょ？」

「んー・・・じゃあお願い」

「ふふっ、素直でよろしい」

つと、小さな掛け声と共に立ち上がる彼女のその突然の動作に驚いたように、周囲の光が少し距離を取る。

ふよふよと浮いているだけのくせに、意外と警戒心は強いのだろうか。

「ノエル。私の名前よ」

座ったままの俺に少し身を屈めて手を差し伸べてきた。

「俺はハルトだよ　よろしく、ノエルさん」

「呼び捨てで構わないわ。私もハルトって呼ばせてもらうから」

「んじゃあ、よろしくノエル」

「ええ、よろしく」

そう言つて柔らかかに微笑んだノエルの手を取つて立ち上がる。

まるで御伽噺のような状況に不安は尽きないけれど。

触れた掌は柔らかく優しい温度がして、少しだけ心が和らいだような気がした。

04 よろしく

「ハルトです、突然お邪魔してすみません」

ノエルからの簡単な紹介にペコリと頭を下げる。

娘が連れてきた男なんてどう考えても要注意人物だ。

せめて少しでも印象よくしておかなければ。

頭を戻した後に目に入ったのは人懐こい笑みを浮かべた少年と、何処か表情を引きつらせた男性だった。

「ごめんね、姉ちゃんが男連れてきたのがかなりショックだったみたいで」

「俺のほうこそいきなり凶々しくて悪い」

あはは、と笑っているのはノエルの弟だと言う少年、セリオ。

挨拶もそこそこに奥へと消えた年長組に代わり俺の相手してくれている。

ふわふわと漂っていた妖精は、町に入る頃には姿を消していた。

「もしかして向こうで怒られてたりする？」

娘がいきなり見ず知らずの男を連れて帰ってきたらそりゃあ親と

しては心配だろう。

しかも数日泊めてなんて言うのだから、殴り飛ばされても文句は言えない。

ただ、完全な親切で声を掛けてくれた彼女が怒られるのは避けたいところだ。

いや、俺が間に入ったら更にややこしくなりそうだけだ。

「それはないよ。ただ、うちの親ちょっと子煩悩すぎるところがあるから」

姉ちゃんに泣きついてるかもしれないなあ。

そう言って笑うセリオにこちらとしては苦笑を返すしかない。

ノエルが泣きついていているんじゃないかと、父親が泣きつく？

どういう状況だそれは。

待っている間にセリオと話して分かったことは、ノエルが俺と同じ17歳でセリオは一つ下の16歳。

二人の父親の名前はリオンさんで、ちょっとした食品や雑貨などを扱う商売をしている。

姓はブライトで、それはそのまま店の名前も兼ねている。《雑貨屋ブライト》と言ったところか。

今日はお店が休みで各自のんびりと過ごしているところに俺がやって来て今に至るようだ。

家族水入らずのはずがビックリだ。

要らぬサプライズである。

「空き部屋はあるけどさすがにちよつと空気入れ替えてからじゃないとダメだろうなあ。今日は僕の部屋でいいかな」

姉ちゃんの部屋はまずいだろうし、父さんと一緒じゃ息詰まるでし

よ？

「泊めてもらえるなら何処だって嬉しいんだけど、まだ分からない
だろ？」

ダメだって言われる可能性の方が高いんじゃないの？

「大丈夫だって」

実に気安く保障してくれるけれど、実際に許可を得るまではドキ
ドキだ。

もし駄目だと言われたらどうしたらいいのかも分からない。

他に宿を探すにしても見ず知らずの俺を泊めてくれるような奇特な
人はそうそういないだろうし、宿屋に泊まる為の金も良く考えたら
持っていない。

唯一ポケットに入っていたケータイはずっと圏外で使えないし、一
文無しだ。

最悪どこかで野宿だが、明日からどうやって過ごせばいいんだ。

しばらく話していると聞こえたドアの開く音にそちらを向くと、
ノエルとリオンさんやってくるところだった。

慌てて椅子から立ち上がれば「そのまま構わないのに」とノエルの
声。

ノエルが構わなくてもああそうですか、と座りなおすわけにもいか
ない。

「さっきは碌に挨拶もせず悪かったね。ハルト君、と言ったかな」

「はい」

「話は娘に聞いたよ。色々と大変みたいだね」

色々と、と言われても一体ノエルはどう説明したのだろうか。曖昧な笑みを浮かべながらも何か言わないと言葉を搜す。

「倒れてたところをノエルさんに助けていただいて・・・えーっとその、ご迷惑だとは重々承知しているんですが・・・」

だが何と切り出せばいいか分からない。

男友達ならともかく女子の家に泊まった経験はない。

しばらく泊めてください？それはあまりに露骨だろうか。

でもオブラートに包んで言ったところで内容はそう変えようがないし。

「そんなに硬くならなくてもいいよ。行くあてがないんだろう？幸い空き部屋もあることだし、しばらくはここにいい。賑やかになるのは大歓迎だよ」

柔らかな笑みを見せるリオンさんの後ろでセリオが「ほらね」と小さく呟いて、リオンさんが不思議そうに振り返る。

「お父さんの許可も得たことだし、改めて歓迎するわ。ようこそ我が家へ！」

両手を軽く広げておどけたように笑うノエルの声に家族は「よろしく」と声を上げる。

断られるだろうと思っていた俺はその展開に付いていけなくて安堵で思わず脱力したように座り込んでしまった。

「どうしたの？」

「絶対駄目だろうと思ってたから、安心して力が・・・」

そう言って「よかったあゝ・・・」と情けない声を洩らす俺の様子に笑いながら、「しっかりとしなさい」と手を差し出してくるノエルの手を掴んで何とか立ち上がり、ふにゃふにゃと力の入らない足を踏ん張って、頭を深く下げる。

「よろしくお願いします！」

こうして俺はどうか当面の宿を確保することに成功したのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4147y/>

いつか祈りが芽吹く時に

2011年11月18日13時19分発行